

農業技術情報

令和5年10月3日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A幕別町	0155-54-4118
J Aさつない	56-2131
J A帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

@ - あ

各作物の生育・作業の遅速（幕別町10月1日）（ ）内は平年値

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	±0	は種始 9/19(9/19) は種期 9/25(9/25) は種終 10/4(10/3)	出芽期 10/3(10/3)
馬鈴しょ	-	収穫期 9/9(9/9) 収穫終 9/25(10/5)	
大豆	早10	茎長 82.5(79.4)cm 葉数 9.8(9.9)枚 莢数 669.0(601.7)個/m ² 主茎節数 11.8(11.9)	成熟期 9/22(10/2)
小豆	早13	茎長 81.0(59.5)cm 葉数 12.4(11.7)枚 莢数 387.1(350.0)個/m ² 主茎節数 13.4(12.7) 収穫始 9/29(9/25) 収穫期 10/- (10/11)	成熟期 9/8(9/21)
菜豆(金時)	-	収穫期 9/7(9/15) 収穫終 9/16(9/26)	
てんさい(移植)	早4	根周 43.9(41.4)cm	
てんさい(直播)	早6	根周 36.2(32.0)cm	
牧草	早4	収穫終 9/7(9/20)	
飼料用とうもろこし	早15	収穫期 9/17(9/21) 収穫終 10/2(10/6)	黄熟期 8/31(9/15)
ながいも(マルチ)	±0	いも長 91.3(75.4)cm いも重 1289(1212)g いも径 62.0(66.6)mm 乾物率 10.5(13.3)%	

畑作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

<秋まき小麦>

1 雑草対策

イネ科雑草を抑制できるのは秋期だけです。特に連作の場合はイネ科雑草の増加が懸念されます。

は種後出芽前の土壌処理が基本ですが、やむをえず処理できなかった場合も、出芽後の除草剤散布は必ず行いましょう（9/5付農業技術情報表4参照）。

<てんさい>

1 収穫

収穫作業は天候に留意しながら、製糖工場や関係農協等と協議して計画的に進める。

2 地力の維持・増進

地力の維持・増進を図るため、ビートトップの鋤込みは収穫直後に行い、分解を促進する。ただし、土壌水分が多いときなど、土壌の物理性を悪化させるような条件では無理して鋤込む必要はない。

3 翌年の作付予定ほ場及び床土の準備

翌年にてんさいの作付けを計画しているほ場では、サブソイラ等による排水対策や土壌診断結果に基づく石灰質資材の投入など、適切な酸度矯正を行う。床土は、土壌水分を30%程度とし、保管に当たっては被覆して凍結や雨水の浸入を防ぐ。

黄化病(旧:西部萎黄病)の発生が見られたほ場では、ビートトップや掘り残し等の収穫後残渣物が翌春に周辺ほ場への伝搬の保毒源となりうるため、しっかりと鋤込み、土壌に埋め込む。

また、媒介虫であるモモアカアブラムシがほ場周辺のハウス等で越冬できないような対策(ハウスビニールの除去、雑草処理、野菜残渣の処理等)を行う。

<豆類>

1 小豆の収穫

収穫が始まっています。「熟莢率」は進んでいるのに葉落ちが遅く、刈り遅れの傾向があります。

やむを得ず高水分収穫し収穫物が高水分(18%以上)になる場合、コンテナ内での変質を防ぐため収穫後速やかに受け入れ先に搬入し、常温通風乾燥により乾燥します。

2 大豆の収穫

9/20付農業技術情報を参照。

<緑肥のすき込み>

9/20付農業技術情報を参照。

<「緑肥用えんばくのいもち病」の対策について(9/20付農業技術情報を参照)>

9月に入った頃から、緑肥用えん麦が枯れる症状「緑肥用えんばくのいもち病(セイヨウチャヒキのいもち病)」がみられています。

発生メカニズムはまだ十分解明されていませんが空気感染します。高湿度が2~3日以上連続すると発生しやすくなります。

セイヨウチャヒキ(エン麦野生種)の方が、一般のえん麦より弱い。ただし、品種によります。小麦に対しては非病原性です。

(対策) 発病が確認された段階で深めにすき込む

(空気感染であり、今回発生ほ場の近隣ほ場に影響が及ぶ可能性があり、次年度の発生リスクが考えられるため)

野菜

<ながいも>

例年より、乾物率が低くかつ、いも長が長い傾向にあります。

つる切りは茎葉黄変後に実施し、品質の向上および収穫時の折れ防止に努めてください。

(参考)乾物率の平年値および過去2年値

作況日	平年	R3	R4	R5
9/1	-	10.8	8.9	8.1
9/15	11.3	12.9	13.1	8.7
10/1	13.3	15.5	13.4	10.5
10/15	14.8	16.5	13.7	
11/1	15.4	17.0	14.8	

※乾物率の目安

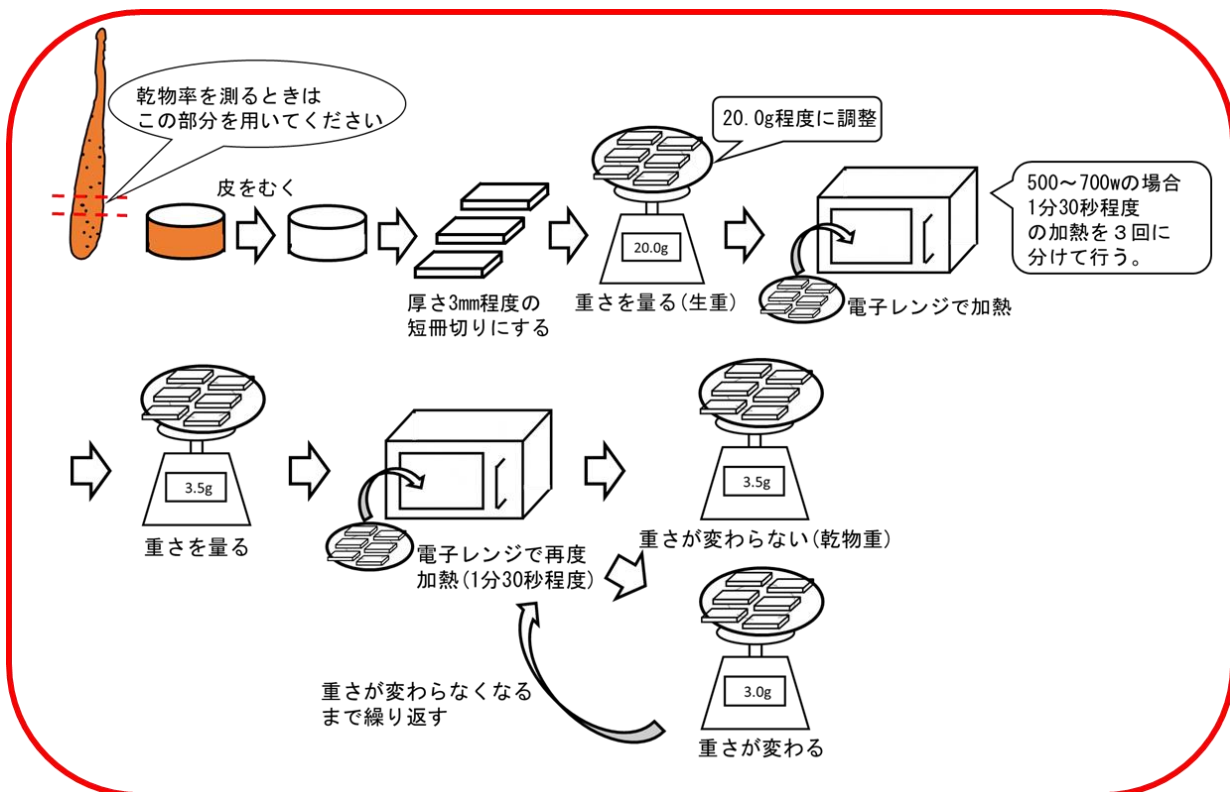
(低)15%未満、(中)15~17%、(高)17%以上
乾物率が低いと貯蔵性、食味の低下に影響します。

(1)つる切り、つる降ろし

- ・実施前に試し掘りをし、尻部が丸く硬くなっていることを確認してから行ってください。
 - ・つる切り、つる降ろしは茎葉が黄変した後に実施してください。黄変前のつる切りは未熟いもの原因になるため注意してください。
 - ・茎葉黄変になる前に霜を受けたほ場では、10月20日以降につる切りを行ってください。*
- ※2006年に東部管内で実施した調査で、10月20日以前(茎葉黄変前)に強い霜を受けて茎葉が枯死しても、いもへの養分転流は進むことが確認されています。

<参考>

☆簡単な乾物率の測り方(精度は±1%程度)焦げた場合は低い値が出ます。



○乾物率=(乾物重÷生重)×100

<注意点>紙皿を用いる際は、加熱により紙皿の重さも変化するため注意してください。また、アルミ皿だと発火するため使用しないでください。

電子レンジ加熱の際は臭いが発生するためこまめに換気してください。

<たまねぎ>

(1) 有機物(堆肥)の投入

現状の地力を維持するためには、堆肥で2~3t/10aが必要とされています。堆肥等の有機物を投入し、気象変動に対応できる土づくりに努めてください。

(2) 透排水性の改善

収穫や収穫物の搬送作業など、大型機械による踏圧により透排水性が悪化しています。コンテナ搬出後にサブソイラ等による心土破碎を実施してください。

(3) 土壌改良資材の施用

- ・たまねぎの適正pHは6.0~6.5、有効態りん酸は60mg~80mg/100gです。
- ・低pHやりん酸不足は、定植後の初期生育の遅れや葉先枯れ、登熟の遅れ等、生育に影響があります。
- ・土壌診断を実施し、健全なほ場管理を行ってください。りん酸、加里の蓄積が見られる場合は、減肥銘柄の選定により施肥バランスの改善を図ってください。

(4) 来年の苗床準備

- ・熟畑化した苗床は、有効態りん酸や加里の過剰な蓄積により土壌養分のバランスがくずれ、育苗中に生育障害が発生しやすくなります。
- ・事前に苗床のpH、ECを測定して、土壌分析値に基づいた土壌改良および適正施肥を行ってください。

(5) 苗床の融雪水対策

ハウス周辺からの融雪水の侵入に注意が必要です。ハウス周辺の明きょ設置やハウスビニールの縁の埋設などの対策を行ってください。

<はくさい>

(1) 菌核病・べと病、黒斑病、白斑病の防除

菌核病やべと病は 20℃前後の多湿条件下で発生が助長されます。雨が予想される場合は発生に注意してください。

※薬剤については、「令和5年度農作物病害虫防除基準または9月 20 日技術情報」を参照。

(2) 害虫防除

気温が低くなるとアブラムシ類やヨトウガが結球内部に入りやすくなります。結球内部に入る前に防除を行いましょう。

※薬剤については、「令和5年度農作物病害虫防除基準」を参照。

日没が早まり視界もすぐに悪くなります。

薄暗がりでは機械の周辺で作業する人が見えにくくなります。

クラクションを鳴らし、周囲に合図してからゆっくり発進するようにしましょう。

・公道を通行する場合は、早めにライトをつけ、夜光反射板や低速車マークを装着しましょう。

・収穫機の調整や詰まりものは、必ずエンジンを止めてから除去しましょう。

・衣服の袖口や裾はボタン・ファスナーを止めて、身体に密着させましょう。

・靴やステップが泥の付着により滑りやすくなります。機械ステップの昇降時は、十分注意しましょう。

※収穫残さ物のほ場での焼却は止めて堆肥化に努めましょう。